

外科医がメスを納めるとき

ある医師会の集まりの席で、“勤務医としていつまでメスを握られるか”ということが話題になった。毎日のようにメスを握っている者として、いつかはメスが握れなくなる時が来るだろうと漠然と考えることはあったが、第一線で活躍中の外科医師の発言に驚かされた。

初めてメスを握った時の緊張と興奮は今でもよく覚えている。手術を終え、汗でグッショリ濡れた術衣を脱ぎ、無事終わった安心感から思わずソファーに座り込んでしまったことが脳裏に浮かぶ。まだまだ自分にとっては先の話だと思っていたが、「〇〇先生も分娩を扱わなくなった」とか、「〇〇先生も手術をやめて入院患者を扱わなくなった」という話を耳にすることも多くなり、“他人事ではないな”という思いに掻き立てられた。

我が国は、超高齢化社会に向かっているとされているが、医師会を構成する医師の年齢構成も例外ではなく、開業の先生方の高齢化ということもあって、第一線で行われている医療内容は大きな変化を見せている。患者さんの大病院志向ということもあって、今迄開業の先生方がされていた手術も大病院で行われることが多く、風邪の様な疾患でも大病院を訪れる患者さんが多くなっている。昼夜無く働く勤務医にとって、一方では目まぐるしく進歩する医療に後れをとらないようにと、研究会や学会にも出席しなければならない現実に対して、「いつまで対応できるだけの体力が・・・」というような話へと発展していった。

<外科医がメスを納めるとき>という命題があったが、“名医”と言われ大勢の後輩の医師を指導・育成し、患者さんから絶大な信頼を受けていたある先生のことを私は思い浮かべていた。

定年後もメスを握り活躍されていたが、奥様を亡くされてしばらくして、独り海の見える一軒家で畑を耕し、自給自足の隠遁生活を送っていると聞かされていた。その先生が、ある時を契機に送り状を持たせて患者さんを紹介してくることが多くなったのである。そんなこともあったので、忘年会の席で挨拶に行くと、「頑張っているそうだね！私は目も見えなくなったし、また根気も無くなってきてしまったのでよろしくお願ひしますよ」と笑顔で応えてくれた。先生はその時既に直腸癌に侵されていて、痛みを耐えながら診療をしていたということを後になって聞かされた。訃報の知らせに駆けつけて、ひつぎ柩の中で安らかに眠っている先生を拝顔した時には思わず目頭が熱くなった。

手術場という舞台上でメスを持った主人公として、派手に振舞い多くの患者さんや看護婦達から羨望の眼と尊敬の念で見られていることを嫌というほど知っている人間が「メスを握れなくなり、メスを納める時、そこには舞台の幕引きもいなければ喝采の拍手も無い・・・」と豪快に笑いながら、自分自身に言い聞かせるような口調で語るその外科医の声で、ふと我に返った。